

【研究ノート】

大学生の部活・サークルへの所属と活動に対する意識が 学校生活満足度に与える影響

安達悠子¹・杉山紗希¹注¹

(¹東海学院大学)

要 約

本研究の目的は、部活とサークルを区別して大学生の部活・サークルへの所属および活動に対する意識が学校生活満足度に与える影響を検討すること、部長・サークル長のリーダーシップが活動に対する意識に与える影響を検討することであった。大学生 185 名を対象に部活・サークルへの所属、活動に対する意識、部長・サークル長のリーダーシップ、学校生活満足度に回答を求める質問紙調査を行った。その結果、活動に対する意識では 1 因子、部長・サークル長のリーダーシップでは「厳しさによる全体の運営」「柔和さによる全体に対する配慮」「褒めによる教示」の 3 因子、学校生活満足度では「孤独」「立ち位置・居場所の確立」「いじめ」の 3 因子が抽出された。そしてサークルに所属しているが活動に対する意識が低い者は「孤独」を強く、部活に所属して活動に対する意識が高い者は「立ち位置・居場所の確立」を強く感じていることが示された。所属があるにも関わらず所属先へのコミットメントが低いことが孤独を増長させている可能性が考えられた。また、部活・サークルに関わらず部長・サークル長のリーダーシップが 3 因子全てにおいて中程度だと成員が認知している場合に、活動に対する意識が高い者が多いことが示された。この結果はリーダーシップのすべての構成因子が高いことを成員は望むという従来の結果とは異なった。大学生の仲間との関わり方の観点から議論したが、この結果が大学生に安定的に見られるかどうかは今後の検討が必要である。

キーワード：大学生、部活、サークル、学校生活満足度、リーダーシップ

はじめに

大学生にとっての部活・サークル

部活やサークルは日本の青年にとって身近な集団の一つと考えられる。大学では部活やサークルに対する加入は学生自身の判断に委ねられているが、全国的にみて大学生・大学院生の部活およびサークルに対する加入率は 1995 年が約 5 割 (49.8%) で 2000 年が約 4 割 (40.8%) であったことが報告されている (内閣府政策統括官 (総合企画調整担当), 2001)。また、新井・松井 (2003) は大学生の部活やサークルに関する研究をレビューし、部活やサークルの加入状況は調査によりばらつきがあるが全体として 4-7 割程の加入率であろうと報告している。さらに、大学生に現在自分が属している組織のなかで最も重要である組織の一つに記載するように求めたところ、バイト先 (28%), 大学 (26%) について、部活 (18%), サークル (17%) が挙げられており (高木, 2006), 大学生にとって部活やサークルが重要な組織の一つであることが窺える。関西大学人権問題研究室女性問題研究班 (1997) は部活やサークルに入った動機は「大学生活を充実させたかったから」の選択肢が女性は 8 割、男性は 6 割で最も多く肯定され、入って満足している点は「大学生活が充実している」が 5 割で最も多かったこ

とを報告している。そして迫・荒井 (2002) は部活やサークルに所属している場合は大学生生活のトータル評価として満足度が高く、部活などフォーマルな集団に所属しているほど満足と回答する者が多いことを示している。また、樋口 (2007) は部活動・サークル活動に対する意識が大学に対する満足感にポジティブに関連していたことを報告している。このように半数程度の大学生が部活やサークルに加入しており、部活・サークルの所属や活動に対する意識が学校生活に対する満足につながっている可能性が示される。

クラブ、部活、サークル、同好会などをあわせてサークル集団と呼ぶ例があるように (e.g., 新井・松井, 2003; 橋本・唐沢・磯崎, 2010; 高田・松井, 2012), 部活とサークルは区分せずに一つに括られることが多いが、数は少ないものの部活とサークルの違いに着目した研究も行われている。例えば、蔵本・菊池 (2006) は部活とサークルで参加動機を比較し、大学生は部活に対しては活動での達成感や社会的利益を求めており、サークルに対しては成員との繋がりや自由な雰囲気をも求めていることを報告した。また、橋爪・高木 (1995) は部活・サークルから退いた経験を持つ大学生に面接調査を行い、同じ競技で部活からサークルに移籍した者のなか

には、活動内容が厳しくとも部活に所属していれば充実感が抱けたのではないかと後悔している者がいたことを報告している。このように部活は厳しさ、サークルは自由に特徴づけられると考えられる。こうした両者の違いを踏まえつつ参加とやりがいといった活動に対する意識という要因を整理して扱うことで、大学生の部活・サークルと学校生活満足度とのより詳細な関連を明らかにすることができるであろう。

部長・サークル長のリーダーシップ

部活やサークルでは上級生のリーダーシップの重要性(鈴木, 1989) やチームリーダーのリーダーシップの重要性(村井・猪俣, 2010) が指摘されており、これらでは部活やサークルのリーダーのリーダーシップが研究対象にされている(e.,g., 野上, 1997)。従来のリーダーシップ研究は企業・組織を対象にしたものが多く、P機能(Performance function) とM機能(Maintenance function) からリーダーの特性を捉えるPM理論(三隅, 2005) の考え方がよく用いられてきた。P機能は集団の目標や課題を効率的に達成させる機能で、M機能は集団内の人間関係に配慮し集団を維持しようとする機能である。大学の部活やサークルのリーダーを対象にした多くの研究でもこの考え方が援用された。

そこではPM理論を背景に作成された質問紙尺度でリーダーシップを測定しているが、使用する尺度や項目は各研究で変更や調整が加えられて抽出される因子構成も研究により異なる。例えば、圧力P機能(課題達成へ向けて圧力をかける)、計画P機能(課題達成のための手順を示す)、M機能(人間的な配慮を示す)の3因子を抽出するもの(e.g., 野上, 1997; 野上, 1999; 高口・坂田・藤本, 2007)、目標志向性、人間関係の維持発展、メンバーに対する激励、競技知識、競技能力の5因子を抽出するものなどがある(e.g., 村井・猪俣, 2010)^{註2}。それらでは大学生の運動部ではM機能が成員の活動に対する個人的な意欲をポジティブに規定すること(野上, 1997) や大学生の部活・サークルのリーダーの圧力P機能が成員の活動に対する動機づけをポジティブに規定すること(高口・坂田・藤本, 2007) が報告されている。部活とサークルでは特徴に違いがあるため(e.g., 蔵本・菊池, 2006; 橋爪・高木, 1995)、それぞれでリーダーシップが活動に対する意識に異なる影響を与えている可能性がある。そのため、部活とサークルを区別して部長・サークル長のリーダーシップが活動に対する意識に与える影響を検討してみたい。

目的

部活とサークルを区別して大学生の部活・サークルの所属および活動に対する意識が学校生活満足度に与える影響を検討する。また、部長・サークル長のリーダーシップが活動に対する意識に与える影響を検討する。

方法

参加者

A大学に所属する大学生185名を対象にして178名から有効回答を得た(男性94名、女性84名、平均年齢19.9 ($SD = 3.4$))。

質問紙

部活・サークルについて：部活またはサークルへの所属を尋ね、「所属している」と回答した者に対しては、活動に対する意識(6項目4件法)と部長・サークル長のリーダーシップ(20項目6件法)に回答を求めた。活動に対する意識は学校生活の下位領域に対する意識(岡田, 2008)から部活動因子を取り上げて「部活」という表現を「部活(サークル)」に変更して使用した。回答は、まったくあてはまらない(1)、ややあてはまらない(2)、ややあてはまる(3)、とてもあてはまる(4)であった。部長・サークル長のリーダーシップは主将のリーダーシップ尺度(吉村, 2005)を用いた。この尺度は、技術指導(7項目)、人間関係調整(5項目)、統率(3項目)、圧力(5項目)の4因子で構成された。回答は、全然あてはまらない(1)、あてはまらない(2)、あまりあてはまらない(3)、ややあてはまる(4)、あてはまる(5)、大変よくあてはまる(6)であった。

学校生活満足度：学校生活満足度尺度(河村, 1999)を用いた。この尺度は、承認(10項目)、被侵害・不適応(10項目)の2因子で構成された。「クラス」という表現を「クラス(ゼミ)」に変更して使用した。回答は、まったくない(1)、あまりない(2)、どちらともいえない(3)、ときどきある(4)、よくある(5)であった。

調査時期および手続き

2017年7月にA大学で授業中および授業前後の空き時間に受講者に質問紙を配布して回答を依頼した。

結果

尺度の確認

尺度の背景：学校生活の下位領域に対する意識(岡田, 2008)と主将のリーダーシップ尺度(吉村, 2005)は中学生を対象に作成された尺度で、学校生活満足度尺度(河村, 1999)は高校生を対象に作成された尺度であった。3つの尺度の項目はいずれも大学生にもあてはまる

と考えられたため使用したが、各尺度に対して因子分析（最尤法、プロマックス回転）で構成因子の確認を行った。因子分析は、因子負荷量が複数因子に .35 以上の項目があればそれを除いて繰り返した。

活動に対する意識：因子分析の結果、1 因子が抽出された（表 1）。Cronbach の α 係数は .89 で内的整合性が確認された。6 項目の平均を下位尺度得点とし、分析に用いた。

部長・サークル長のリーダーシップ：因子分析の結果、3 因子が抽出された（表 2）。Cronbach の α 係数は第 1 因子から順に、 $\alpha = .94, .91, .90$ と高い値が示されて内的整合性が確認された。第 1 因子は「厳しさによる全体の運営」、第 2 因子は「柔和さによる全体に対する配慮」、第 3 因子は「褒めによる教示」と命名した。各因子を構成する項目の平均値を下位尺度得点として分析に用いた。

学校生活満足度：因子分析の結果、3 因子が抽出された（表 3）。Cronbach の α 係数は第 1 因子から順に、 $\alpha = .90, .83, .93$ と高い値が示されて内的整合性が確認された。第 1 因子は「孤独」、第 2 因子は「立ち位置・居場所の確立」、第 3 因子は「いじめ」と命名した。各

因子を構成する項目の平均値を下位尺度得点として分析に用いた。

部活・サークルへの所属と活動に対する意識

部活またはサークルへの所属の回答から、無所属は 61 名、部活に所属は 59 名、サークルに所属は 58 名であった。分析にあたり、部活・サークルに所属している者を活動に対する意識の下位尺度得点が平均 ($M = 3.26, SD = 0.60$) を上回る場合は活動に対する意識高群、未満の場合は活動に対する意識低群とみなし、所属と意識高/低の組み合わせで区分した。その結果、「無所属 (61 名)」、「サークル・意識低 (41 名)」、「サークル・意識高 (17 名)」、「部活・意識低 (20 名)」、「部活・意識高 (39 名)」の 5 群に分類された。

部活・サークルへの所属と活動に対する意識による学校生活満足度の差

部活・サークルへの所属と活動に対する意識が学校生活満足度に与える影響を検討するため、群別に学校生活満足度の下位尺度得点を算出した（図 1, 2, 3）。下位尺度得点を従属変数に一要因分散分析をした結果、「孤独」では有意差が見られ ($F(4, 173) = 2.72, p = .03$)、多重比較によりサークル・意識低群はサークル・意識

表 1 活動に対する意識の因子分析の結果

項目	1	M	SD
1 部活・サークルをやることにやりがいを感じる	.811	3.3	0.7
6 自分の部活・サークルは仲のよい楽しい集団である	.790	3.4	0.6
4 自分は部活・サークルの中で自分を出していると思う	.786	3.1	0.8
2 自分は部活・サークルでうまくいっている	.765	3.1	0.8
3 部活・サークルには自主的に参加している	.750	3.3	0.8
5 自分の部活・サークルは希望していた部活・サークルである	.631	3.4	0.8

表 2 部長・サークル長のリーダーシップの因子分析の結果

項目	1	2	3	M	SD
7 練習(活動)に遅れたり黙って休んだら厳しく注意する	1.029	-.027	-.199	3.8	1.6
10 厳しく命令したり注意したりする	1.019	-.257	-.057	3.3	1.6
19 練習態度が悪い時には注意する	.779	.199	-.023	3.8	1.5
8 先輩に対する態度を指導する	.736	-.046	.170	3.7	1.5
16 練習中(活動中)の服装が部活(サークル)に相応しくなければ厳しく注意する	.694	-.103	.121	3.5	1.6
20 失敗した時等、失敗した人を責めるのではなく技術について注意を与える	.600	.105	.229	3.9	1.5
9 部(サークル)の目標を中心となって立てる	.404	.247	.273	4.1	1.5
11 練習の内容や計画を部員(サークルメンバー)が分かるように教える	.383	.318	.211	4.2	1.4
5 部員(サークルメンバー)全員が馴染めるような雰囲気を作る努力をしている	.104	.998	-.266	4.4	1.3
1 部員(サークルメンバー)みんなができるような計画を立てる	.048	.838	-.121	4.5	1.2
3 部員(サークルメンバー)の悩みには親切に相談に乗ってくれる	-.168	.788	-.034	4.5	1.2
2 気まずい雰囲気があると解きほぐす	-.326	.724	.230	4.3	1.2
6 反省したことは次に生かすように指導する	.148	.578	.156	4.3	1.3
17 失敗した時など冗談を言ったりしてみんなを励ます	-.046	.546	.279	4.3	1.4
18 部(サークル)全体をうまくまとめる	.270	.486	.162	4.1	1.4
4 みんなで外出する時は中心になってみんなをまとめる	.075	.384	.339	4.0	1.4
13 技術やコツを上手に教える	-.028	-.137	1.115	4.0	1.5
12 競技(サークル活動)についてよく知っているし上手だ	.030	.069	.763	4.3	1.4
14 よいプレーをしたり、いい結果が出たらほめる	.159	.225	.435	4.5	1.3
因子間相関	1	2	3		
	2	.693	—		
	3	.701	.741		

15「練習の時は主将(サークル長)が自分からお手本を見せて指導する」は除外。

表3 学校生活満足度の因子分析の結果

項目	1	2	3	M	SD
17 私はクラスの中で、孤独感を覚えることがある	.948	-.035	-.036	2.3	1.1
18 私はクラスの中で浮いている感じたことがある	.945	.088	-.087	2.3	1.2
16 クラスで班をつくる時など、なかなか班に入れずに残ってしまうことがある	.714	-.075	.228	2.2	1.1
19 私は休み時間などに、ひとりであることが多い	.669	-.053	.087	2.4	1.2
20 私はクラスにいるときや部活、サークルをしているとき、周りの目が気になって不安や緊張を覚えることがある	.532	.030	.109	2.5	1.2
<hr/>					
5 私は学校・クラス（ゼミ）でみんなから注目されるような経験をしたことがある	.224	.765	-.212	2.8	1.0
4 仲のよいグループの中では中心的なメンバーである	-.003	.750	.059	2.8	0.9
2 私は学校の中で存在感があると思う	-.074	.726	.125	2.7	1.0
3 私はクラス（ゼミ）やクラブの活動でリーダーシップをとることがある	-.041	.657	.277	2.5	1.0
1 私は勉強や運動、特技やひょうきんさなどで友人から認められていると思う	-.038	.638	-.034	3.0	0.9
7 私はクラス（ゼミ）で行う活動には積極的に取り組んでいる	.032	.627	-.014	2.9	1.0
10 学校内に自分の本音や悩みを話せる友人がいる	-.098	.422	-.205	3.4	1.1
9 在籍している学校に満足している	-.110	.381	.001	3.0	1.0
<hr/>					
13 私はクラス（ゼミ）や部活でからかわれたりバカにされるようなことがある	.016	.056	.865	2.1	1.1
12 私はクラスメート（ゼミメンバー）から、耐えられない悪ふざけをされることがある	.102	.022	.806	2.1	1.2
14 私は授業中に発言をしたり先生の質問に答えたりするとき、冷やかされることがある	.120	-.039	.769	2.0	1.0
15 私はクラブなどの仲間から無視されることがある	.258	-.043	.685	2.0	1.1
<hr/>					
	因子間相関				
	1	2	3		
	2	-.010	—		
	3	.680	.173		

6「学校生活で充実感や満足感を覚えることがある」、8「学校内で私を認めてくれる先生がいると思う」、11「私はクラス（ゼミ）の人から無視されるようなことがある」は除外。

高群や部活・意識高群に比べて「孤独」が高いことが示された（順に、 $p = .019, 004$ ）。「立ち位置・居場所の確立」でも有意差が見られ（ $F(4, 173) = 2.64, p = .04$ ）、多重比較により無所属群は部活・意識高群に比べて「立ち位置・居場所の確立」が低いことが示された（ $p = .002$ ）。「いじめ」では有意差は見られなかった（ $F(4, 173) = 0.87, p = .43$ ）。

部長・サークル長のリーダーシップと活動に対する意識との関連

部長・サークル長のリーダーシップと活動に対する意識との関連を検討するに先立ち、主将のリーダーシップ尺度の下位因子得点に基づきクラスター分析を行い（Ward法）、部活・サークルに所属している者を群分けした。その結果、3群に区分された（I群から順に、41名、50名、26名）。3群で部長・サークル長のリーダーシップの下位尺度得点の平均を比較したところ（表4）、「厳しさによる全体に対する運営」では有意差が見られ（ $F(2, 114) = 142.03, p = .000$ ）、I群とII群、II群とIII群、I群とIII群の間に有意差があった（全て $p = .000$ ）。「柔和さによる全体に対する配慮」にも有意差が見られ（ $F(2, 114) = 92.92, p = .000$ ）、I群とII群、II群とIII群、I群とIII群の間に有意差があった（全て $p = .000$ ）。「褒めによる教示」にも有意差が見られ（ $F(2, 114) = 135.74, p = .000$ ）、I群とII群、II群とIII群、I群とIII群の間に有意差があった（全て $p = .000$ ）。すなわち、I群は所属する部長・サークル長のリーダーシップに対して3因子共に低く評価している群、II群は中程度に評価している群、III群は高く評価している群であった。

部活・サークルにおいて部長・サークル長のリーダー

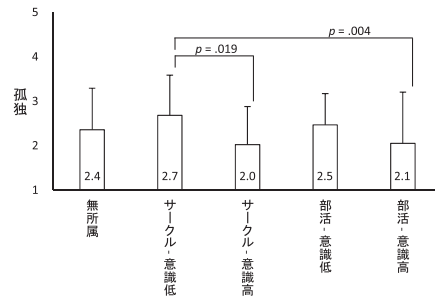


図1 群別の学校生活満足度「孤独」

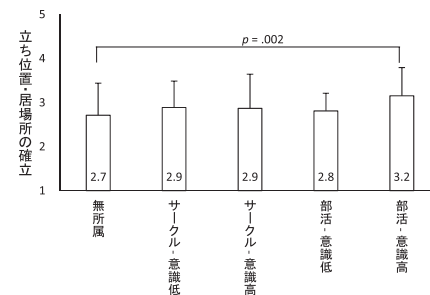


図2 群別の学校生活満足度「立ち位置・居場所の確立」

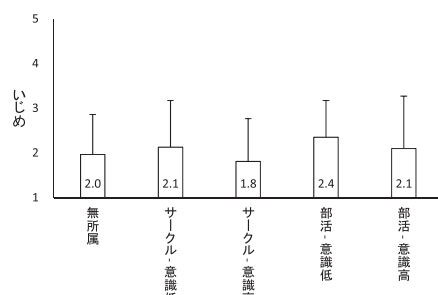


図3 群別の学校生活満足度「いじめ」

表4 リーダーシップに基づく群別の下位尺度得点

	I	II	III
厳しさによる全体の運営	2.4(0.7)	4.1(0.7)	5.2(0.6)
柔和さによる全体への配慮	3.5(0.8)	4.2(0.6)	5.7(0.4)
褒めによる教示	3.0(0.9)	4.5(0.7)	5.9(0.2)

()内はSD

表5 所属、部長・サークル長のリーダーシップ、活動に対する意識による区分 (人数)

		部長・サークル長のタイプ					
		I		II		III	
活動に対する意識		低	高	低	高	低	高
所属	サークル	19	5	1	6	21	6
	部活	11	15	3	16	6	8

シップが活動に対する意識に与える影響を検討するため、所属(部活・サークル)と部長・サークル長のリーダーシップ(I・II・III群)と活動に対する意識(意識高・意識低群)を組み合わせで人数の内訳を示した(表5)。3変数で χ^2 検定を行った結果、部長・サークル長のリーダーシップ×活動に対する意識で有意差が見られ($\chi^2 = 12.24, df = 2, p < .01$)、残差分析の結果、リーダーシップII群では活動に対する意識低群は少なく活動に対する意識高群が多かった($p < .01$)。また、所属×活動に対する意識で有意差が見られ($\chi^2 = 5.61, df = 1, p < .05$)、残差分析の結果、サークルでは活動に対する意識低群が多く意識高群が少なかった($p < .01$)。部活では活動に対する意識低群が少なく意識高群が多かった($p < .01$)。

考察

部活・サークルへの所属と活動に対する意識による学校生活満足度の差

部活とサークルを区別して大学生の部活・サークルへの所属および活動に対する意識が学校生活満足度に与える影響を検討した。まず、サークルに所属しているが活動に対する意識が低い者は部活あるいはサークルに所属して活動に対する意識が高い者に比べて「孤独」が高かった。すなわち、部活・サークルの所属だけではなく活動に対する意識が孤独の評価に関わっていることが示唆された。無所属ではなくサークルに所属しているが活動に対する意識が低い者が最も孤独の値が高く、部活に所属しているが活動に対する意識が低い者が二番目に孤独の値が高かったことから、所属があるにも関わらず所属先へのコミットメントが低いことが孤独を増長させていると考えられる。橋本ら(2010)は大学生のサー

クル集団では活動自体の楽しさや仲間関係・友人関係が所属の主たる理由となっていることから、情緒的な愛着を基にした情緒的コミットメントがコミットメント次元として第一に挙げられると予想し、実際にサークル集団の組織コミットメントの第一因子として抽出している。組織に所属することで得られることを期待した情緒的コミットメントが得られないことで孤独を強く感じた可能性があり、それが活動自体への重点よりも自由さに特徴づけられがちなサークルで顕著であったと考えられる。

また、サークルにも部活にも所属していない者は部活に所属して活動に対する意識が高い者に比べて「立ち位置・居場所の確立」が低かった。高木(2006, 2007)が部活とサークルを分けた分析で、部活でもサークルでもそれらが自分にとって重要な組織だと考えている大学生は、当該組織へ自己を内在化することで自己の存在の肯定を得て精神的な健康としての充実感を得ているという関係を示している。組織への重視が「立ち位置・居場所」に関わるという点では、同様のメカニズムがあると解釈できる。しかし、本研究ではサークルに所属して活動に対する意識が高い者ではこのような結果は示されず、部活はサークルに比べて立ち位置や居場所が確立しやすい組織である可能性が考えられる。またサークルでは活動に対する意識が低い者が多く、部活では活動に対する意識が高い者が多かった。この結果は、部活は厳しさを伴い、サークルは自由さが強いという特徴があるため、部活では活動に対して高い意識を持ちやすかったために生じたと考えられる。

部長・サークル長のリーダーシップと活動に対する意識の関連

部長・サークル長のリーダーシップは「厳しさによる全体の運営」「柔和さによる全体への配慮」「褒めによる教示」の3因子が抽出された。「厳しさによる全体の運営」「褒めによる教示」はP機能、「柔和さによる全体への配慮」はM機能に概ね該当すると捉えられる。ただし部長・サークル長のリーダーシップ尺度への回答に基づき部活・サークルに所属している対象者を分類したところ、3因子の高さから3群に分類された。一般的にリーダーシップのP機能とM機能は両方高いことが最も望まれる。例えば、坂西(1989)は高校サッカー部を対象に質問紙調査を行い、75%の部員が主将のリーダーシップにPM型を志向していると回答したことを報告し、このP機能とM機能が共に強いリーダーシップを強く志向する点は従来の職場集団を初めとする種々の研究結果と一致するものであると述べている。しかし、部長・サークル長のリーダーシップが活動に対する意識に与え

る影響を検討したところ、本研究では部活とサークル共に部長・サークル長のリーダーシップが中程度と成員が認知している場合に活動に対する意識が高い者が多かった。すなわち、大学生ではリーダーが中程度のリーダーシップを發揮するにとどまっている方がやりがいを感じたり、楽しかったり、自主的に参加したりと活動に対する意識が高いことが示された。その理由として、発達段階で青年期にあたる大学生における仲間・友人との関わり方が考えられる。落合・佐藤(1996)や榎本(1999)は、中学生から大学生にかけての友人関係はお互いの個性の尊重をあまり望まず一緒に遊ぶ傾向からお互いの異質性を受け入れる関係へと変化すること、そして青年期の友人関係が直接的な結びつきから内的な結びつきを形成することで互いが自立的な関係を築いていくことを指摘している。また、安達・山崎(2017)は、高校生を対象に学年が上がるにつれて主観的幸福感に影響を及ぼす要因が「友人との行動」という外面的な側面から「仲間への姿勢」という内面的な側面へ変化することを示しており、この傾向が進めば大学生では友人関係がより自立的になってくると推測される。こうした自立的な関係においては、P機能とM機能が共に高いPM型の優れたリーダーシップの下で活動すること以上に、中程度に優れたリーダーシップの下で自主性や自立性を發揮しながら活動できることが活動への意識の高さに繋がった可能性が考えられる。

今後の課題

本研究では大学生の部活・サークルの所属や活動への意識、部長・サークル長のリーダーシップ、学校生活満足度の関連を明らかにした。しかし、学校生活満足度の測定において「学校生活で充実感や満足感を覚えることがある」といった包括的な項目が分析の結果から除外された。また「クラス」という表現を含む項目が多くあったが、「クラス」ではなく「学校」と表現を変えるなどして直接的に大学生生活全般について問うような変更を検討すべきであったかもしれない。また、リーダーシップと活動に対する意識の関連の検討において個人特性は要因に含めなかった。しかし、坂西(1989)は劣等感の強い人は対人的配慮の厚いpM型の集団で主将に対する親しみが大きいことを報告しており、野上(1997)は自律性の高い部員ほど主将のM機能のポジティブな効果が現れやすく圧力P機能のネガティブな影響が現れにくく、自律性の低い部員ほど主将の計画P機能のポジティブな効果が現れやすいことを報告している。本研究でリーダーシップの各側面がいずれも中程度であることが活動に対する意識の高さと関連している可能性が示され

たが、これが大学生に安定的に見られる結果かどうかや成員の個人特性を要因に加えての検討が今後も必要であろう。

謝辞

本調査にご協力くださった皆さまにこの場をかりて改めて御礼を申し上げます。

注

注1：本稿は第2著者が2017年度に東海学院大学人間関係学部心理学科に提出した卒業論文を第1著者が再分析し全面的に改稿したものである。

注2：目標志向性と競技知識はP機能、人間関係の維持発展とメンバーに対する激励と競技能力はM機能に該当すると村井・猪俣(2010)は位置づけている。

引用文献

- 安達悠子・山崎起志(2017). 高校生の主観的幸福感と友人関係の関連—学年の差に注目した検討— 東海学院大学紀要, 11, 157-163.
- 新井洋輔・松井 豊(2003). 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向 筑波大学心理学研究, 26, 95-105.
- 坂西友秀(1989). フォロアーのパersonality特性の関数としてのリーダーシップ効果 教育心理学研究 37(2), 107-116.
- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47(2), 180-190.
- 樋口康彦(2007). 大学生の適応に影響を与える要因に関する考察—ソーシャルスキル, 交友関係などの観点から— 国際教養学部紀要, 3, 97-102.
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年(2010). 大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討 実験社会心理学研究, 50(1), 76-88.
- 橋爪裕子・高木 修(1995). クラブ・サークルに対する加入から離脱までの意思決定過程の研究 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 86-87.
- 関西大学人権問題研究室女性問題研究班(1997). 課外活動とジェンダー—関西大学スポーツ系クラブ・サークルの学生意識調査— 関西大学人権問題研究室紀要, 39, 1-98.
- 河村茂雄(1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度(高校生用)の作成— 岩手大学教育学部研究年報, 59(1), 111-120.
- 高口 央・坂田桐子・藤本光平(2007). リーダーシップとプロトタイプ性が集団成員のモラルとリーダー知覚に及ぼす効果 社会心理学研究, 22(3), 245-257.
- 蔵本健太・菊池秀夫(2006). 大学生の組織スポーツの参加動機に関する研究—体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較— 中京大学体育学論叢, 47(1), 37-48.
- 三隅二不二(2005). リーダーシップ行動の科学 有斐閣
- 村井 剛・猪俣公宏(2010). 勝利志向型スポーツチームにおける理想のキャプテン像について 実験社会心理学研究, 50(1), 28-36.
- 内閣府政策統括官(総合企画調整担当)(2001). 第II部青少年を対象とする調査の結果 第1章学校関係 第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書, 37.

- 野上 真 (1997). 大学生運動部主将のリーダーシップ効果を規定する諸要因 実験社会心理学研究, 37 (2), 203-215.
- 野上 真 (1999). 大学生運動部主将の圧力 P, 計画 P, M と部員のモラール—PM リーダーシップ論に基づく提言— スポーツ社会学研究, 7, 55-61.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあいの発達的变化 教育心理学研究, 44 (1), 55-65.
- 岡田有司 (2008). 学校生活の下位領域に対する意識と中学校に対する心理的適応—順応することと享受することの違い— パーソナリティ研究, 16 (3), 388-395.
- 迫 俊道・荒井貞光 (2002). 大学生のクラブ・サークル活動に関する研究 広島体育学研究, 28, 11-20
- 鈴木 邁 (1989). 課外活動における指導者の役割 大学と学生, 288, 13-18.
- 高田治樹・松井 豊 (2012). 大学生のサークル集団に関する研究動向—新井・松井 (2003) からの研究動向の変化— 筑波大学心理学研究, 43, 25-35.
- 高木浩人 (2006). 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 愛知学院大学心身科学部紀要, 2, 61-67.
- 高木浩人 (2007). 大学生の組織帰属意識と充実感の関係(2) 愛知学院大学心身科学部紀要, 3, 47-54.
- 吉村 斉 (2005). 部活動に対する適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係 教育心理学研究, 53, 151-161.

Effects of affiliation to a club or circle and awareness of its activities on satisfaction with school life among undergraduates

Yuko Adachi and Saki Sugiyama

Abstract

We distinguished between clubs and circles, examined the influence of affiliation to these and awareness of the included activities on satisfaction with school life, and how leadership in a club or circle influences awareness of its activities among undergraduates. We conducted a questionnaire survey on affiliation with a club or circle, awareness of its activities, club or circle leadership, and school life satisfaction among 185 undergraduates. Regarding awareness of activities, one constituent factor was identified. Regarding leadership of the club or circle, three constituent factors were identified: the severity of the whole operation, a gentle consideration of the whole, and teaching by praise. Regarding satisfaction with school life, three factors were identified: loneliness, security in membership / perception of warmth, and bullying. Additionally, those who belonged to a circle but were not active in club or circle activities felt very lonely while those who belonged to a club and were actively involved in club or circle activities felt very secure in their membership and considered the club a warm place. It was suggested that low commitment to club/circle affiliation despite being a member may increase loneliness. Additional findings showed that many people got actively involved in club/circle activities when they perceived all three constituent factors above to be moderately inherent in club or circle leadership. This differs from the conventional finding that members desire that all the constituent factors of leadership be high. We discussed this result from the viewpoint of how undergraduates interact with colleagues. However, future studies are necessary to see whether this result is consistently observed among university students.

Keywords : Undergraduates, Club activities, Circles (Group activities), Satisfaction with school life, Leadership